

大量の組織データが拓く「組織のヘルスケア」

矢野 和男

日立製作所基礎研究所 主管研究長

2010年5月29日

概要

19世紀には、社会活動の多くが個人か家庭を単位に行われていたのに対し、20世紀にはこれらが組織によって行われるようになり、組織が社会の基本単位となった。

「組織のヘルスケア」は、この社会の基本単位としての「組織」の健康状態を、診断、処方、維持、強化するシステムである。個人の健康に対しては、毎年国家レベルで巨額の費用が費やされているが、組織についてはほとんど省みられていない。しかし、個人の健康も、属する組織やコミュニティの健康状態に大きく左右され、個人と組織は相互につながりあっていて、本来分けることはできないものである。

現状、実務上も、学問上も、組織については属人的で定性的な議論しかできず、科学的に取り扱うことは難しかった。しかし、組織を計るMRIとして「ビジネス顕微鏡」が登場し、状況が劇的に変わりつつある。既に10万人日を超える大量の人間組織のデータが計測・蓄積・解析され、新しい法則が日々発見されている。ここでは、ネットワーク理論、非線形・協力系の物理、組織心理学、ポジティブ心理学、行動科学などが融合した新しい「組織物理学」が生まれようとしている。

従来、我々が組織に用いている定性的な概念、例えば「現場力」「リーダー力」「風通しのよさ」「権限委譲」「官僚的」「俊敏性」「内向き志向」「やらされ感」「縦割り」「適応力」「活力」などが定量化され計測可能となる。これにより「保守 vs 革新」「現場 vs リーダー」などの「二項対立」を超える「二項統合」へ至る道を、大量データから科学的に明らかにする。同時に、このような大量組織データを活用した科学技術と応用サービスとの共進化について論じたい。